

保育者養成学生の動物との関わりについて ——動物への対応と幼児への援助について——

栗原 泰子*・野尻 裕子**

About Relations Between the Those Who Take Care of Child Teaching Course Student and the Animal

Yasuko KURIHARA, Yuko NOJIRI

要 旨

保育現場において、生きている教材としての動植物は重要なものである。特に動物は実際にふれることによって、生命としての実感を得られるものである。生命に触れることにより、子どもたちは生命の尊さや生物の生態の不思議さなどに触れることができる。

本研究では、保育者養成学生の幼児期の動物との記憶と、実際の保育状況を想定しての動物と子どもとのかかわりについての考えについて調査を行った。その結果、学生自身はおおむね動物については肯定的な意識をもっているが、個人レベルでは昆虫に対する苦手感があることが明らかになった。また保育の中での子どもと動物に関する援助では、肯定的に考えており、その援助方法は、直接動物と触れ合うことだけでなく、様々な媒体を利用して、環境を整えていくことによりなされるべきであるという考え方を持っていることも明らかになった。

キーワード：保育者養成学生，動物，幼児期，援助方法

*教授 幼児教育学

**准教授 幼児教育学

1. はじめに

幼稚園や保育所の保育現場において、動物の飼育は多く行われていることである。その多くは動物当番という当番活動として、あるいは動物と触れ合う活動として位置づけられている。

保育者をめざす学生は、大学入学時にその動機を幼児期の体験から語る者が多い。幼稚園時代に出会った教師やその援助などによって、自分も保育者を目指すことになったというようにあることである。したがって、保育者をめざす学生にとって幼児期の思い出は大きな影響力を持つと考えられる。

そこで、日本乳幼児教育学会の2003年度の研究大会において、私たちは「幼児期の遊びの思い出とその特徴」についての発表を行った。その際、自然に関する思い出として語られた遊びは、全体の遊びの7.4%であり、その素材は植物がほとんどであった。

また、「原風景の保育者像」の中で、保育者の援助について語られる思い出の中では、保育内容でみると、「健康」「表現」の2つの領域に偏りがみられ、「環境」に関する記述は1名の学生が「花や草の名を教えてくれた」がみられるのみであった。動物に関する思い出は語られることがなかった。このことは、自由に思い出を想起するということから、より印象に残ったものが語られていたことも考えられ、偏りの見られた領域以外にも何らかの経験が見られるのではないかと思う¹。

そこで、本研究においては、「動物」をキーワードとして取り上げ、保育者養成課程の学生が、幼児期に動物とどのように触れ合っていたのか、現在動物に対してどのようなとらえ方をしてしているのか、また保育者として子どもたちに動物との触れ合う機会を作る際の援助についてどのように捉えているのかを明らかにしたいと考えた。

2. 研究目的

本研究においては、学生が幼少期の幼稚園・保育所において、どのような動物との触れ合いを記憶しているのか、好き嫌いの原因をどのようなものとしてとらえているのか。また、自分が保育者として考えた場合、子どもたちにどのような動物との触れ合いを考えているのかについて明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

対象：4年制大学教育学部幼児教育学科3年生 95名

調査日：2006年7月6日（木）

調査内容：①園において飼育されていた動物と飼育者

- ②自分自身のかかわり方
- ③動物に対する好悪とその理由
- ④保育の中で子どもが動物と触れ合うことについて
- ⑤子どもと触れ合う際のねらい及び援助について
- ⑥動物嫌いの子どもへの援助について

4. 領域「環境」の保育内容について

動物との触れ合いに関する保育内容は、領域「環境」の中に設定されている。領域は保育者が幼児の遊びを見るための窓口であり、小学校のように子どもたちに認知されているものではない。したがって、小学校の理科のように子どもたちは、今どのような学習を行っているかの自覚はない。

「環境」は「周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。」領域として設定されている。幼稚園教育要領、保育所保育指針において、それぞれ規定されているが、ここでは、動物の飼育に関する内容のみを以下に挙げる。

幼稚園教育要領及び保育賞保育指針

<幼稚園教育要領>（抜粋）

1 ねらい

- (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
- (2) 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。

2 内容

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- (5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。

3 内容の取扱い

- (3) 身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探究心などが養われるようにすること。

<保育所保育指針> (抜粋)

第7章 3歳児の保育の内容

3 ねらい

- (8) 身近な動植物や自然事象に親しみ、自然に触れ十分に遊ぶことを楽しむ。

4 内容

「環境」

- (1) 身近な動植物をはじめ自然事象をよく見たり、触れたりなどして驚き、親しみを持つ。

第8章 4歳児の保育の内容

3 ねらい

- (10) 身近な動植物に親しみ、それらに関心や愛情を持つ。

4 内容

「環境」

- (1) 身近な動植物の世話を楽しんで行い、愛情を持つ。

5 配慮事項

「環境」

- (1) 動植物の飼育や栽培の手伝いを通して、それらへの興味や関心を持つようにし、その成長・変化などに感動し、愛護する気持ちを育てるようにする。

第9章 5歳児の保育の内容

4 内容

「環境」

- (1) 身近な動植物に関心を持ち、いたわり、世話をする。

5 配慮事項

「環境」

- (1) 飼育・栽培を通して、どのようにして生きているのか、育つのか興味を持ち、生命が持

つ不思議さに気付くようにする。

- (2) 動植物と自分たちの生活との関わりに目を向け、それらに感謝やいたわりの気持ちを育てていくようにする。

第10章 6歳児の保育の内容

4 内容

「環境」

- (1) 身近な動植物に親しみ、いたわったり、進んで世話をしたりする。

5 配慮事項

「環境」

- (1) 動植物とのふれ合いや飼育・栽培などを通して、自分たちの生活との関わりに気付き、感謝の気持ちや生命を尊重する心が育つようにする。

幼稚園教育要領は、幼児が幼稚園修了までに育つことが期待されるねらい及び内容を一括して示している。一方、保育所保育指針では、子どもの発達過程ごとに内容が構成されている。動植物に関する記述の中で、究極的に目指されているものは両者ともに、生命に対する不思議さや畏敬の念をもつことなどとなっている。したがって、動物の飼育をすることが目的のではなく、それを通して子どもの内面的な育ちが期待されているのである。

現行の幼稚園教育要領及び保育所保育指針はそれぞれ平成10年、平成11年に改訂が行われている。その際、前教育要領、指針の趣旨を受け継ぎながら、特に時代の変化に対応するために必要とされた事項が追加された。そのひとつが領域環境の「生命の尊さ」に対する気づきであった。また同様に領域人間関係においても「高齢者とのかかわり」もとりあげられており、こうした経緯からも今、子ども達の命とのかかわりは時代の要請といえるのかもしれない。

5. 結果及び考察

(1) 園において飼育されていた動物と飼育者

この項目への回答者は59名で全体の62.1%である。

表1 園において飼育されていた動物
(複数回答)

動物名	N	%回答者 / 対象者
ウサギ	58	61.3
ニワトリ	24	25.4
モルモット	13	13.6
キンギョ	11	11.9
カメ	11	11.9

ここでは22種類の動物が具体的な名前としてあげられている。多くあげられていた動物は、ウサギ61.3%、ニワトリ25.4%、インコ16.9%、モルモット13.6%、金魚・カメ11.9%となっていた。これは、日本保育学会第55回大会で中村陽一らが発表した「幼稚園における飼育の実態に関する研究」の中で、あげられていた動物と多くのものが重複している³。(この研究ではウサギ、ニワトリ、カタツムリ、インコ、ザリガニ、カメ、金魚となっていた)ウサギやニワトリなどやや大型の動物は、動物小屋など、飼育用に作られた施設において飼われていることが多いが、ケージなどによって、飼育されている場合もある。モルモットやキンギョ、カメなどは、室内において各クラスなどで飼育されていることもある。クラスで飼育される動物にはこの他にも小鳥類などもいる。

この結果から、保育現場において飼育されている動物は共通性がみられると言える。幼稚園等において飼育される動物は、世話が割合簡単で、生命力が強く、子どもたちがかわいいと思う小動物が中心となっていると思われる。

これらの動物を誰が飼育をしていたかについては、教師が一番多く49名(83.1%)の学生があげている。ついで、子どもが36名61.0%となっていた。動物当番という役割が年長組の子どもに課せられていたとする学生が多く見られ、教師とともにこの活動に取り組んでいたことが伺える。動物に対する子どもの興味は、3・4歳児ではあまり長時間維持できず、多くの園では、年長児が動物当番を担っていることが多い。しかし、この結果にあるように、世話は教師が行い、子どもが自由に餌をあげていたというように自由に遊ぶ中で動物と触れ合うということも見られた。保育所保育指針に挙げられていたように、動物に対して進んで世話をするという保育内容が設定されていることから、何らかの形で世話をする活動が必要であろう。それは、当番という形をとらなくても、自由に餌を上げるというような形でも行われうるものであろうし、何よりも大切なことは、動物と触れ合う経験を積み重ねていくことであろう。

(2) 自分自身のかかわり方について

表2 自分自身のかかわりについて

かかわり方	N	%
餌をやる	22	32.4
触って遊ぶ	17	25.0
昆虫を捕まえる	14	20.6
小動物を抱く	12	17.6
その他	3	4.4
計	68	100.0

幼少期に動物と関わった記憶のある学生は68名で、全体の71.6%であった。動物というキーワードを提示することにより、このような思い出が想起されたものと思われる。かかわり方については、餌をやるが全体の32.4%となっており、幼児期の動物との触れ合いという、その動物に餌をやるということがまず第1に想起されたものと思われる。実際の保育現場においても、動物当番で動物に餌をやる以外に、クラスなどで飼育されている小鳥などに庭に生えている草を摘んできてケージに差し入れている姿もよく見られる。ついで、触って遊ぶ25.0%となっている。具体的な姿としては、ハムスターやモルモットなどをなでるように触るという行動であり、抱くというように積極的なかかわりはできないが、ふわふわした体を触りたいという気持ちから、このような行為がみられると思われる。ついで昆虫を捕まえる20.6%である。春から秋にかけて、園庭などにはさまざまな昆虫が訪れる。アリやバッタ、チョウチョやトンボ、セミなど、子どもたちは夢中になっておいかけている。また小動物を抱くが17.6%となっている。4歳児などは、クラスで飼っているハムスターやモルモットを実際に抱いてみたいという気持ちからこのような行為がよく見られる。飼育活動が行われている園においては、餌をやる活動は幼児が行いやすい活動であろう。また、季節によって昆虫やダンゴムシなどを捕まえて集めるというようなことも多く行われていると思われる。

学生のかかわり方についてみると、飼育動物に関しては、その世話を中心に、それ以外の園環境の中に存在している昆虫などについては捕まえたり、集めたりというように幼児一人一人の思いで接触していたことがわかる。

(3) 動物に対する好悪とその理由

動物が好きと答えた学生が70名で全体の73.7%、しかし嫌いな理由を答えた学生が55名で

全体の57.9%となっており、条件付きで好きであるとする学生が多いことがわかる。小動物などは全体的に好まれる傾向があるが、嫌いな動物は昆虫が筆頭にあげられ、全体の58.2%の学生が嫌いとしている。ついで鳥、幼虫、両生類などとなっている。

動物が好きな理由については、「かわいいから」「関わるが多かったから」「癒されるから」などが挙げられている。保育の中で扱う保育教材などの中でも動物が取り上げられていることが多い。絵本や紙芝居、幼児の歌う曲などのなかには、動物が登場するものが多く見られる。「かわいいから」という回答は、これらの教材などで強化された感情であることも考えられる。「関わるが多かった」ということは、記憶が強化される当然の結果であろう。そして3番目の「癒されるから」というものは、どちらかという、大人になってから過去を振り返って考えてみた上での記憶の修正という側面も考えられる。いずれにしてもこれらの回答は情緒的な面からの理由付けが多くみられている。

反対に動物が嫌いな理由についても、「気持ち悪いから」「恐いから」などとなっている。「気持ちが悪いから」というのは、幼児期にそのような嫌悪感をもっていたのか、あるいは成長する過程において形成されたのかは明らかではないが、どちらかという大人になる過程において強化されていた感覚なのではないかと思われる。同じように「恐いから」というのもそのような経験をすることによって強化されたり、知識を獲得することによって形成された側面もあるのではないだろうか。いずれにしても、好きな理由と同じように情緒的な面からの理由付けがみられる。中には小さいときの嫌な経験がトラウマとなっているとしている学生もみられた。

昆虫が嫌いな学生が多く見られることについて、嫌いな理由は明らかになったが、その嫌悪感がどのようにして形成されたかは明らかにはならなかった。

(4) 保育の中で子どもが動物と触れ合うことについて

幼児がいかに生き物を理解していくのか（生物概念）については、稲垣（1995）の研究を注目したい⁴。特に飼育活動と生物概念獲得の関連については、主体的活動としての飼育活動のもつ可能性が大きいことを示している。具体的には、飼育活動はその生物の飼育手続き的、観察可能な事実に基づく知識を高めるだけでなく、観察不可能な事実に基づく知識をも高めているというのである。更にその生物に対する概念的知識の広がりにつながり、最終的に未知の生物の類推の基礎として適用しているのである。このように主体的な飼育経験は、知識の獲得レベルにおいてのみ捉えても、かなり有効な経験であることが分かる。

本調査結果をみると、子どもが保育の中で動物と触れ合うことについては、ほとんどの学生が必要なことであるという肯定的な位置づけがみられる。

保育者養成学生の動物との関わりについて

表3 動物と触れ合うことについて

(複数回答)

項目	N	% (回答者 / 対象者)
命の大切さを学べる	54	56.8
動物に対する愛情	25	26.3
直接体験ができる	19	20.0
思いやりの心	16	16.8
動物の世話	15	15.8
動物に関する知識	15	15.8
死について考えるきっかけ	10	10.5

まず半数以上の学生が、命の大切さについて触れることができるということをあげている。これは、幼稚園教育要領や保育所保育指針における動植物のふれ合いの究極の目的となっているものとも合致している。園での生活の中で、子どもたちは動物の死に直面することがある。昆虫の死なども含めると、何度かの死を体験しているのである。死そのものをどのように受け入れるのかは、子どもによって異なるであろうが、お墓を作ってお参りをしたり、死ぬとはどういうことなのかを話し合ったりする姿も見られる。植物が生きていることや死ぬことについては、実感が得られづらいものであるが、動物という生きた教材から子どもたちが学ぶことのできる内容は幅広いものである。動物と触れ合うという直接体験によって、動物の心臓の拍動や動きから、「生きている」ということを実感することができ、またそのことにより動物に対する愛情や思いやりの心が育つという相互に関連をもった内容となっている。学生達は、動物という教材をポジティブにとらえており、そのことから子どもたちが学ぶことを多様に考えていることが明らかになった。言い換えれば、どちらかという知識面での学びよりは、情緒、心情面での育ちを期待しているといえる。

(5) 子どもと動物のふれ合いに関する保育内容

表4 具体的な保育内容について

(複数回答)

項目	N	% (回答者 / 対象者)
動物当番	55	57.9
動物のふれ合いコーナー	24	25.3
園外保育・動物園	19	20.0
観察	11	11.6
絵本・紙芝居	11	11.6

調査対象が3年生ということもあり、保育実習を経験してはいるが、幼稚園の教育実習はまだ経験はしていない。従って自分の幼児期の体験と自分自身が保育者となるであろう想定とを関連させながら、この回答を行っているものと思われる。

実際に子どもが動物とかかわる保育内容については、半数以上の学生が「動物当番」を挙げている。自分自身の思い出の中では動物当番をあげる学生がそれほど多くなかったのが、保育者という立場から考えることによって、このような結果になったと思われる。当番活動以外にも「動物との触れ合いコーナー」を設置して、子どもたちが動物と関われるようなことを考えたり、あるいは「園外保育」などで動物園などに出向き、いろいろな動物を見ることも考えている。この回答のほとんどが、子どもと動物の触れ合う環境を設定することを考えていることから、学生は子どもと動物との触れ合いの必要性を自覚していることがわかる。「(4) 動物と触れ合うことについて」で挙げたような内容を、それぞれの幼児が学んでいくことを期待しているのである。保育者が、子どもの学びに対しては積極的に関わるのではなく、子どもが動物と直接関わることにより、何らかの学びが期待されているという、どちらかというとな消極的な考えも見られる。ここでの回答の文章の中に「動物」という言葉が付されていることから、この回答には、学生が好きだと捉えている小動物を中心に考えていることが分かる。

先ほど挙げたように、好きな動物だけではなく、嫌いな動物に対しても子どもたちへの援助を行って行かなければならないことを考えると、養成期間のなかで、どのような援助方法や保育内容を修得させていくかは課題であると考ええる。

(6) 動物嫌いの子どもへの援助について

表5 動物嫌いな子どもへの援助について

(複数回答)

項目	N	% (回答者/対象者)
見るだけ	29	30.5
絵本や話で興味を持たせる	29	30.5
徐々に馴らしていく	23	24.2
友達関係で	18	18.9
環境づくり	14	14.7
保育者がモデルとなる	10	10.5
言葉がけ	10	10.5

動物嫌いの子どもに対しては、無理をさせないということが基本的に共通して見られる態度であった。自分自身の体験から考えてみても、動物が嫌いな場合、それを触るということは出来なかったであろうし、「見るだけ」という行動が一番多く見られるものであったと考えられる。興味がないわけではないが、直接触ることはイヤだと言う場合、「見るだけ」という最も消極的な行為が行われるのである。実際に保育者も動物を外から見るだけというような援助が一番多くみられ、子どもが動物を嫌いになるよりは、興味を維持させていこうという援助が考えられる。また、絵本や保育者のいろいろな話から、興味を持たせていくということが同じ割合で援助の方法としてあげられていた。動物が嫌いな子どもに対して、何らかの方法や教材などによって援助していこうという方向性がこの回答から見られる。また、保育者や動物好きの子どもが媒介となって徐々に動物に慣らしていくというように、動物が嫌いな子どもでも自分から動物と関わろうという気持ちにするための援助を考えているということがわかる。

以上のように、保育者養成学生は、自分自身は動物についての好き嫌いを自覚してはいるが、保育者という立場で考えてみた場合、その教材としての意義を高く評価していることが明らかになった。

5. まとめ

今回の研究から、次のようなことが明らかになった。

- ① 学生は概ね小動物に対してはポジティブな感情を持っているが、昆虫など種類によっては苦手意識をもつ学生が多く見られる。
- ② 子どもと動物が関わることについては、肯定的に捉えている。
- ③ 具体的な保育内容に関しては、環境づくりを中心とした保育の展開を考えている。
- ④ 動物嫌いの子どもへの対応に関しては、子どもの興味を喚起することにより、子ども自身が主体的に動物と関わることを期待している。

保育のなかで動植物は生命を持つ教材として、貴重な意味をもつものである。特に動物は直接触れ合うことで、生きているものを実感できるために、子どもにとって有効な教材となるものである。具体的にどのような保育を展開していくのか、実物以外の媒体をどのように保育に位置づけていくのか、学生とともに考えて行かなければならない問題であろう。

年間を通して園環境の中に存在するものとして昆虫があげられる。今回の調査結果から昆虫を苦手とする学生が多く見られることから、子どもと昆虫との関わりにおける援助等に影響を及ぼすことも考えられる。日常的に昆虫はどの保育現場においても見られるものであり、子ど

栗原泰子・野尻裕子

もたちも興味を示す身近なものである。関連する授業等において、学生たちの考え方をどのようにサポートしていくかが課題となるであろう。

引用文献

- (1) 文部科学省「幼稚園教育要領」
- (2) 厚生労働省「保育所保育指針」
- (3) 中村陽一・渡辺ユカリ・遠藤翠「幼稚園における飼育の実態に関する研究」日本保育学会第55回大会発表論文集. 日本保育学会. 2002. pp440-441
- (4) 稲垣佳代子「生物概念の獲得と変化—幼児の「素朴生物学」をめぐって—」風間書房. 1995. pp66-89